

スペイン語の子音における口蓋音化

La palatalización de las consonantes españolas

原 誠
Makoto HARA

0. 本稿は1990年5月20日(日)に京都産業大学において開催された第27回日本ロマンス語学会大会における筆者の口頭発表をのちに文章化したものである。同大会の統一テーマは「ロマンス語における口蓋音化」であったので、筆者の口頭発表もこれに従ったものである。

1. スペイン語史における俗ラテン語子音の口蓋音化

まず何はともあれ、Menéndez Pidal, 1962に基づいて、スペイン語史の上で起こった、俗ラテン語子音の口蓋音化を洗いざらいリスト・アップすることから始めることにしよう。Menéndez Pidal, 1962ではそのp. 91から「§ 34. ラテン語の子音」と題する章が始まっている。そしてp. 93に進むと、2]として、

“その後、ラテン語の大衆的あるいは日常的発音は、古いラテン語の慣用とは裏腹に、ある種の音の口蓋音化への顕著な傾向がその目立った特徴であった。”と書かれている。

1.1. $K^e, i > \theta$

この変化はp. 93の§ 34. 2] a)の項に書かれているもので、例としては、
PACE > *pače > paže > paz (平和)
が挙げられる。

1.2. $G^e, i > j$

この変化はp. 94の§ 34. 2] b)の項に出ている。例：GYPSU > yeso (石膏)

1.3. TY, KY > θ

この変化はp. 94の3] a)に出ているのだが、a)に入る前にMenéndez Pidalの重要な発言がある。

“古いラテン語にはなかった新しい口蓋音の出現の主たる原因はヤ行音の普及ぶりと影響力であった。”

筆者はのちに2. でAlarcos, 1965のp. 237に出ている、「ラテン語の子音体系には、有声摩擦音素も硬口蓋音素もなかった」という発言を引用するが、逆にそれだからこその広汎な硬口蓋音素序列を空白にしておくのは無駄だから、そこを新しい音素で埋めようという力が働いたのである。従ってこのMenéndez Pidalの発言はAlarcos的な見方の伏線を形成していると見ることができる。

TY > θ の例としては、TITIONE > *tičón > tizón (燃えさし)を、KY > θ の例としては、ACIARIU > *ačero > acero (はがね)を挙げることができる。

1.4. LY>ɫ>ʒ, NY>ñ

この変化は p. 95 の 3] b) に出ているもので、

LY>ɫ>ʒ の例としては、

MULIERE>*muler>mujer (女性; 妻)

NY>ñ の例としては、

VINEA>viña (ブドウ畑)

をそれぞれ挙げるができる。

1.5. S->š-

p. 118 から「語頭子音」の変化の章に入るが、この変化は § 37b) として p. 119 に出ているものである。しかも語頭の S- が必ず š- に口蓋音化するというのではなくて、時々この変化が起こるというのである。これは硬口蓋子音の s と、舌先歯茎音の s とが音声的に酷似しているがため起こった混同というふうに説明できる。いま Alarcos, 1965 の p. 266 からその例を拾うと、中世カスティーヤ語では simio (サル) の他に, ximio (現在の jimio) という形があったそうだし, sastre (仕立て屋) という形の他に, xastre という形もあったそうである。ここでは

SAPONE>xabón>jabón (セッケン)

という例を出しておこう。

1.6. K^e, l->č-

この変化は p. 120 に § 37 2] c) として出ているもので、その例としては

*CICĚRU>chícharo (エンドウ豆の 1 種)

を挙げるができる。

1.7. I+Ā->ja-

共和国時代の古いラテン語では I+A は 2 音節を形成していたと考えられるが、これが俗ラテン語では 1 音節になった。つまり I が j に子音化したのである。

例: IACET>yace (彼は横たわる)

1.8. PL-, KL-, FL->ɫ-

p. 125 から § 39 として「語頭子音群」の章が始まる。そして p. 126 には 2] として標題の音変化が出ている。それらの例はそれぞれ、

PLICARE>llegar (到着する)

CLAMARE>llamar (呼ぶ)

FLAMMA>llama (燄)

である。

1.9. -I->-j-

p. 133 からは § 43 として「母音間有声摩擦音」の章が始まる。そのうち 1] のところに標記の音変化が出ているが、これは 1.7. が語頭での変化だったのに対し、母音間に環境が変わっただけのことである。

例：MAIORE>mayor (より大きい)

1.10. -LL->-l-, -NN->-ñ-

p. 134 からは § 45 として「母音間二重子音」の変化が扱われていて、p. 135 に 3] として標記の音変化が出ている。

例：VALLE>valle (溪谷；盆地)

CANNA>caña (茎；釣り竿)

1.11. -MN->-nn->-ñ-

p. 135 からは § 47 として「語内子音群」が扱われている。そのうちの第 1 番目の硬口蓋子音生成の例として標記の音変化が出ている。§ 47 の 1] は二つの子音がいずれも不変化のままのケースであり、2] には両者が同化したり、2 番目の子音に変化したり 1 番目の子音が母音化したりするケースが挙げられている。前者が a) となっていて、後者が b) であり、p. 138 に a) の一つとして標記の変化が出ている。

例：DOMNU>dueño (あるじ，主人)

1.12. -ULT->-uč-

p. 139 からは § 47 の 2] の c) のケースが出ている。これはまず真ん中の L が口蓋化し、それから母音化する。この結果できた口蓋音 j が後続の t を自分の調音点へと引っ張ってととし、uč となるのである (p. 140 所載)

例：A(U)SCULTAT>escucha (彼は耳を傾ける)

1.13. -KT->-č-

p. 143 の § 50 のタイトルは「軟口蓋音と歯音とから成る子音群は両子音の相互接近によって硬口蓋音を生じると大変長い。その 1] に -KT->-č- が出ている。この K が ç を経由して j となったか、それとも g を経て j となったかで意見が大きく二つに分かれている。この問題を詳細に検討した結果、Menéndez Pidal と同じく、前者を支持した論文に坪井，1990がある。

例：LACTE>leche (牛乳)

1.14. X = KS>š

p. 144 に、同じく § 50 の 2] が出ており、それが標記の音変化を扱っている。ここでも Menéndez Pidal は k が ç を経て j となったとしている。

例：TAXU>tešo>tejo (瓦や石のかげら)

1.15 -GN->-ñ-

同じく p. 144 に 3] としてこの音変化が出ている。この場合は明らかに g が j に変わったのである。

例：LĪGNA>leña (薪)

1.16. -子音+PL, FL, KL->-č-

p. 145 の § 51 は「三つの子音から成る子音群」と題されている。その 2] として出ているのがこの音変化である。

例：AMPLU>ancho (幅の広い)

INFLARE>hinchar (ふくらませる)

MANC'LA>mancha (汚点, シミ)

1.17. -FFL->-f-

この音変化もやはり p. 145 の § 51 の 2]の中に出てくるのだが、変化結果が -f- となっていることから分かる通り、実はこれは例外的ケースなのである。Menéndez Pidal によると、この場合は f が摩擦音なので語頭子音群と同じ扱いを受けて -f- となる (1.8. 参照) とのことである。

例：AFFLARE (においをかぐ) >hallar (見つける)

1.18. -DY-, -GY->-j-

p. 147 以降に出ている § 53 は「半母音 Y に伴われた子音」と題されていて、その 3] (p. 148) にこの変化現象が出ている。

例：RADIARE>rayar (線を引く；隣接する)

EXAGIU>ensayo (試み, エッセイ)

1.19. -K'L-, -G'L-, -T'L->-f-

p. 153 からは「ロマンス語になってから成立した語内子音群」の章が始まり、まず § 53 は「これら子音群の変化についての概説」と題されている。そして p. 158 の § 57 に至ると、「L に先行する子音は、その子音群がラテン語の時とは違ひ硬口蓋音を時に生むことがある」と題して、1] 両唇音、2] 軟口蓋音、3] 歯音に細分されている。当然のことながら、-K'L-, -G'L- は 2] に属し、-T'L- は 3] に属している。いずれも p. 159 に出ている。

例：-K'L->-f- OCULU>ofo>ojo (眼)

-G'L->-f- TEGULA>tefa>teja (かわら)

-T'L->-f- VETULU>VECLU>viefo<viejo (年老いた)

1.20. -子音+K'L->-č-

p. 163 以降の § 61 は「三つあるいはそれ以上の子音群」と題されていて、p. 164 に 2] としてこの音変化が出ている。

例：CIRCULU>*cercho, cercha (彎曲した板, [アーチなどの] せり枠)

1.21. -子音+G^oL->f または ñ

これも § 61 の 2] の中に付随的に出ている音変化である (p. 164)。

例: SÜBGLÜTTIARE>sollozar (すすり泣く)

UNGÜLA>uña (爪)

以上 Menéndez Pidal, 1962 から、俗ラテン語からスペイン語へ移行する過程において硬口蓋音を生成した音(群)を列挙してきた。スペイン語学の立場からはここまでですでに統一テーマの要請に応えたことに一応はなる。しかしこれだけでは Menéndez Pidal, 1962 から必要部分を写し取っただけであり、お世辞にも論文とは言えない。そこでこの機会を利用して、筆者にとってかねてからの懸案であった「いったいぜんたい音声学的に言って硬口蓋音というのは硬音なのか、それとも軟音なのか」というテーマに筆者なりの解決を与えてみようという気を起こした。筆者がこういう気を起こした一因は、かねてより筆者が中南米のスペイン語の諸音声現象についてその各々がたるみであるか、張りであるかを問題にしており、まさにこのたるみこそ軟音化であり、張りこそ硬音化であることにある。

2. 俗ラテン語からスペイン語への移行過程で生じた硬口蓋子音についての構造的解釈。

硬口蓋子音ははたして硬音なのか軟音なのかという問題の詮索に入る前に、1. で列挙したもろもろの硬口蓋子音化が、スペイン語の子音体系上いかなる機能的意義を有するかについて考察しておきたい。

1. 3. でも少し触れておいたが、Alarcos, 1965 によると、「俗ラテン語の子音体系には硬口蓋音素が一つもなかった。従ってある種の軟口蓋音や歯音の異音は、既存の音素と合一する心配なしに硬口蓋音序列へとその調音点を変えることができたのだった。つまりある音素が他の音素から区別されている安全地帯の枠からはみ出ることなく、その拡散範囲を広げることのできるようなあきまというか、無人の境があったということなのだ。」(p. 237) ということである。つまり俗ラテン語では硬口蓋音序列には音素は皆無であった——と Alarcos は言うのだが、筆者はもとから /y/ だけは存在していたと思う——のだが、こんなに広い無人の境をそのままにしておくのはもったいないと思ったのだろうか、無声・破裂音系列には *t* を入れ、有声・破裂音系列には、*b*, *d*, *g* と平行させるのはいささか苦しい——破擦異音 [ʃ] がたまに現れるものの、/y/ の代表的異音は [j] という摩擦異音だから——が、*y* を入れ、さらには歯(茎)音序列に *θ* が入ったために、これまた大いに苦しいが、舌尖歯茎音の *s* を無声・摩擦音系列に入れる。さらに鼻音系列には、これは正真正銘の硬口蓋子音である *ɲ* が入り、その他安住の地はないけれども——従って /*ɲ*/ が消えた方が我々には好都合だ——、流音の中から *ɾ* を硬口蓋音序列に属さしめることができる。つまりあれよあれよという間に、*y* しかなかった硬口蓋音序列が色々な硬口蓋子音的子音によってふさがってしまったのである。かくてスペイン語の子音体系は 4 × 4 のきれいな正方形——軟口蓋音序列と鼻音系列の交差する /*ɲ*/ の位置が埋まる可能性は皆無だが(この点については原, 1984 の p. 36 を参照のこと)——を形成する方向へと着々と向かいつつあるのである。

3. Martinet, 1955

さていよいよここから音声学的に見て硬口蓋音は硬音か軟音かの検討に入る。硬口蓋音は、西ロマニヤのロマンス諸語に関する限り、硬音であると主張するのが Martinet である。この彼の説は初め Martinet, 1952 で主張されたものであるが、のちに彼自身英語からフランス語に直して Martinet, 1955 の中に第11章として取り入れている。本稿では Martinet, 1955 の中の第11章から関係部分を拙訳により以下に抜書していく。

3.1. p. 276, l. 16., 11. 24.

“ガスコニー語とポルトガル語では、変化を蒙ったのは対立の弱い方のメンバーである -n- である。”
この文言は上記 2 言語において -n- がゼロになったことを意味している。

3.2. p. 276, l. 21., 11. 24.

“-nn- から派生した、強い調音の N は、ポルトガル語の anno や penna (筆者注：現在の綴りは ano, pena) におけるがごとく、表記の伝統が -nn- を保っている所では、単一の n になることができた。”

この文言によって Martinet がラテン語の二重子音 -NN- を硬音だと思っていることが分かる。どちらが先に起こったかは簡単には言えないが、ポルトガル語では -NN->-n-, -N->ϕ は連動しているのである。

3.3. p. 277, l. 14., 11. 25.

“castet, castetš < CASTELLUM におけるがごとく、語末の破裂音または摩擦音は、古代における -LL->-f->-d- の変化、すなわち強い調音の保持が起こったことを示しているように思われよう。”

これはガスコニー語で起こった現象を述べているのであり、[d] はそり舌の d を表わしていると考えられる。

3.4. p. 282, l. 21., 11. 31.

“この [ñ] も、強い調音の -N- (ラテン語の -NN- から派生) と同一とみなされる変化過程によって説明されよう。”

この ñ はレオン方言の語頭に現れるものであり、n- として現れるカスティーヤ語より自然であると考えられる。

Cf. レオン方言 ñueite (夜)

カスティーヤ語 noche (夜)

3.5. p. 283, l. 4., 11. 32.

“語頭の鳴音の強化を説明するのに、人は語頭子音がしばしば特別なエネルギーをもって調音されると主張したくなるかもしれない。”

これをスペイン語の b, d, g で説明すると、これら 3 音は語頭、つまりポーズのあとでは破裂音として現れるが、語内、とくに母音間では摩擦音で現れることで明らかである。

3.6. p. 285, l. 4., 11. 35.

“しかしここでもまた状況は破裂音と鳴音とは違うことを我々は忘れてはならない。すなわち破裂音の [d] は同時に t の弱いペアでもあり、また δ の強いペアであるのに対し、語頭の [r] は R の弱いペアしか解されえないのである。”

鳴音という語がよく出てくるが、これは流音や鼻音の総称である。

3.7. p. 285, l. 24., 11. 36.

“さらに、話し手たちには、強い音素が母音間で頻出するのに対し、強い位置で弱い音素を調音する習慣がなかった。”

これはカスティーヤ語で λ, \tilde{n} が母音間で頻出するのに対し、語頭で λ, \tilde{n} が出るはずなのに、 l, n が出ることを言っている。

3.8. 西ロマニヤにおける母音間無声破裂子音の軟音化

3.1. から 3.7. まで Martinet, 1955 の第11章の関係部分のみを抜粋したが、これだけでは何のことかさっぱり分からないはずなので、少し説明を加えることにする。

レト・ロマン語、フランス語、プロヴァンス語、カタルーニャ語、カスティーヤ語、ポルトガル語の6言語から成る西ロマニヤのロマンス諸語においては、1) 母音間無声破裂二重子音の単子音化、2) 母音間無声破裂単子音の有声化、3) 母音間有声破裂単子音の摩擦音化という3種類の軟音化が連鎖的に起こった。この軟音化が1), 2), 3) の順に起こったか、それとも3), 2), 1) の順に起こったかについては、原, 1984の p. 9 で紹介したように、Haudricourt & Juilland, 1970 の p. 58 以降および Martinet, 1952の p. 199 が前者の説を主張し、逆に Alarcos, 1965 の p. 243 および Lausberg, 1965 の p. 407 が後者の説を支持している。この件については筆者は、すでに原, 1981 の p. 15 で述べたように、どちらかと言えば後者の説を支持したいが、とくにこの問題の解決に関心があるわけではないというのが正直なところである。それよりも Martinet, 1952 および Martinet, 1955 の結論が、構造的な説明を否定するわけではないが、主として大陸ケルト語の軟音化の影響によって、つまり下層言語説によって軟音化を説明しようとしている点が筆者は気に入らない。すでに筆者は Martinet への反論を、原, 1981の pp. 15-19 で述べておいた。それはともかく、いま以上3種類の軟音化を図示すると、

- 1) 2) 3)
-pp->-p->-b->-β-(>φ)
-tt->-t->-d->-δ-(>φ)
-kk->-k->-g->-γ-(>φ)

となる。

3.9. 軟音化にちなんでの比例式の設定

いま唇音序列を例にとり、1), 3), 2) の順でそれぞれ比例式を設定してみよう。

- 1) -pp-:-p- = 二重子音: 単子音 = 硬音: 軟音
3) -b-:-β- = 破裂音: 摩擦音 = 硬音: 軟音
2) -p-:-b- = 無声音: 有声音 = 非同化音: 同化音 = 硬音: 軟音

これら比例式設定の際にいちばん困ったのは2)である。というのはフランス語ではすでに音声学的に、

$p:b$ = 硬音: 軟音

なのだが、スペイン語では

$p:b$ = 無声: 有声

なのである。なおこの点についてフランス語に関しては日本音声学会, 1976 の p. 622 を、スペイン語に関しては Alarcos, 1965 の p. 179, ディ・ピエトロ, 1974 の p. 188 および Quilis, 1981 の p. 122 をそれぞれ参照

した。従ってスペイン語に関しては、p:b, t:d, k:g について「硬音：軟音」のペアは非関与的ということになる。しかしここで我々は別の見方をすることができる。すなわち -p- は母音間で -b- になっている。母音は有声音である。両側を有声音に挟まれた無声音が有声音になるということは、とりもなおさず同化である。同化は即軟音化である。

3.10. 強い位置と弱い位置

3.9. では我々は語内、とくに母音間に注目した。こんどは本節では眼を語頭に転じてみよう。次の諸語の語頭に注目していただきたい。

PECTĪNE>peine (くし)

BADIU>bayo ([馬が] 鹿毛 [かげ] の)

TEGŪLA>teja (かわら)

DIGĪTU>dedo (指)

COGNATU>cuñado (義兄弟)

GALLICU>galgo (猟犬)

俗ラテン語の語頭の破裂子音はどれを見てもカスティーヤ語で不変化のままである。かくて **Martinet** は次のような比例式を考え出した。

語頭：母音間＝強い位置：弱い位置

3.11. 鳴音への硬音：軟音および強い位置：弱い位置の適用

以上硬音：軟音，強い位置：弱い位置の理論を，**Martinet** は母音間破裂子音について打ち立てておいてこんどは鳴音に適用してみる。ただし母音間破裂子音については西ロマニアのロマンス諸語全部に対して適用していたのに，鳴音となるといつの間にかその適用範囲がガスコーニュ語，レオン方言，カスティーヤ語，そして時たまポルトガル語に限られてくるのは腑に落ちない。

3.11.1. m について

MÖLLE>muelle (バネ；波止場)

FLAMMA>llama (焰)

M- も -MM- もカスティーヤ語で同一の m になっているから，**Martinet** 理論は m については当てはまらない。

3.11.2 n について

NEBULA>niebla (霧)

CANNA>caña (茎，釣り竿)

ここで **Martinet** は「ラテン語で二重子音イコール硬音ならば，スペイン語でのその変化結果も当然硬音である」という論法をここに適用する。ということは母音間の -ñ-(<-NN-) は硬音ということになる。となると語頭にも ñ- が現わねばならないのだが，実際には n- が現れているから，**Martinet** 理論は n についても当てはまらないことになる。**Martinet** は **Martinet**, 1955 の p. 285, l. 29 において苦しまぎれにこの語頭の n- を

バスク語下層言語説に帰せしめているが、説得力ゼロである。しかしそこはうまくしたもので、Zamora, 1970 の p. 130 を見ると、レオン方言について、ño, ñascer, ñombre, ñubloso, ñoramala, irños, deñostar 等の例が出ているし、-NN- についても -n- もあるが、-ñ- もある (p. 153) とのことなので、レオン方言は一応 Martinet 理論にとって好都合とすることができよう。

ここで我々はとくに、Martinet によって ñ が硬音と解釈されたことに注目せねばならない。

3.11.3. l について

DOLORE > dolor (痛み)

VALLE > valle ['baʎe] (溪谷; 盆地)

上記二つの例から分かるとおり、dolor の -l- が軟音であり、valle の -ll- [-ʎ-] が硬音ということになる。従って語頭には ʎ- が現れるはずだが、カスティーヤ語では LACŪNA > laguna (小さな湖) のように l- が現れている。これを Alarcos, 1965 は本稿 1.8. PL-, KL-, FL- > ʎ- のせいとしている (p. 251) が、これには Catalán, 1962 の反論がある。しかしいずれにせよ、この場合にも Martinet 理論は当てはまらないことになる。しかしこれまたよくしたもので、やはりレオン方言やカタルーニャ語で、L- > ʎ- となっている。例: LUNA > lluna.

ここでも我々は ʎ 音が、少なくともカスティーヤ語において硬音と解せられたことに注目すべきである。

3.11.4. r について

RADICE > raíz (根)

FERU > fiero (どう猛な)

CARRU > carro (馬車)

上記の例で raíz の r- も carro の -rr- もふるえ音であり、しかし音声学的にも、軟音のはじき音に対して硬音であるから、r については Martinet 理論は当てはまると言える。

3.11.5. s について

鳴音ではないが、s についても Martinet 理論は見事に当てはまる。

SOMNU > sueño (夢; 眠気)

CASA > casa ['kaza]

GROSSU > grueso (厚い)

これら3例で S- と -SS- から派生した grueso の -s- とが硬音、casa の -s- [-z-] が軟音となる。

3.12. まとめ

以上 Martinet 理論を考察してきたが、カスティーヤ語の鳴音に関する限り、それは m と n と l についてはうまく当てはまらず、そういう状態の中で、ñ と ʎ とを硬音だとする解釈は、少なくともカスティーヤ語に関する限り苦しいと考えられる。しかも、ラテン語で二重子音は硬音である、従って西ロマニャのロマンス諸語でもその変化結果は自動的に硬音であるとする論法はいささか強引に過ぎると思わざるをえない。またかりにラテン語において二重子音だった音が硬口蓋音に変化して、それが硬音だとみなされたとしても、現在のスペイン

語共時音声学の立場からも硬音とみなされるかどうかは別問題である。しかしいずれにせよ、Martinet 理論によれば、 \tilde{n} と Λ は硬音ということになったことだけを我々はしっかりと記憶しておこう。

4. デイ ピエトロ, 1974

上記の書物の p. 188 には「表 7.2 スペイン語の分節素の余剰行列」があり、何らの説明もなしに, y, Λ , \tilde{c} , \tilde{n} の四つの硬口蓋子音は +tense となっている。ちなみに Chomsky & Halle, 1968 の p. 177 の表では硬口蓋子音にとって \pm tense は全く非関与的である。

5. Jakobson, Fant & Halle, 1961

いままでに硬口蓋子音は硬音であるという説を二つ紹介してきたので、こんどはそれは軟音であるという説も二つ紹介する。その最初のものが標記の書物であるが、しかしだからといって、この書物の中で硬口蓋子音は軟音であると書かれてあるわけではない、むしろ硬口蓋子音：非硬口蓋子音の対立は sharp:plain の対立として捉えられている。従ってその意味では何もここで Jakobson, Fant & Halle, 1961 を引用する必要はない。ただその p. 31 に出ているロシア語の単語の例を引用したかっただけだ。

例：

{mjat' 揉む	{mat' 母	{krof' 血
{mjat 揉んだ	{mat 王手詰み	{krof 隠れ家

各ペアの上の方に書いてある単語にはアポストロフィが付いているが、この記号が付いたらその前の子音は口蓋化するを示している。ロシア語では子音が口蓋化することを俗に「軟音化」と呼んでいる。たとえばグレーコワ, 1988 に p. 307 は次のような文章がある。

“彼の流れるような、いい声の、古風なモスクワ式発音の話聴くのは肉体的な快楽であった。彼は硬音の子音を軟化させて発音した。”

東京大学の佐藤 純一氏にこのロシア語の軟音ということばは正式のロシア語音声学の術語であるかどうかうかがってみたところ、そうではないとのお返事をいただいた。ちなみに、Jakobson, Fant & Halle, 1961 では、硬音：軟音の対立は, p:b, t:d, k:g, s:z 等の対立および母音の高低の対立を表わすためにのみ用いられている。

6. 直野, 1967

こんどはルーマニア語に眼を転じる。標記の書物の p. 18 に §3 音交替, a. 子音交替として次のような表があがっている。

単数 複数
lup ——— lup' (狼)
vulpe ——— vulp' (キツネ)
硬音 軟音

これもまたロシア語と同じケースと考えられる。東京外国語大学でルーマニア語を教えておられる倍賞和子氏にうかがってみても、硬音・軟音の別は非音声学的な用語であり、ご自身は「非口蓋化子音・口蓋化子音」という用語を用いておられるとのことであった。

7. イタリア語

CIVITATE>città (都市)

この例におけるように、[ki-] が [çi-] になるのは調音点の同化が起こっているから、明らかに軟音化である。しかし

FACTU>fatto (行動)

では二重子音化が起こっているから、軟音化ということになるのだろうか。他方では、-KT- が -tt- となっているのだから、これは同化であり、軟音化だという解釈も成り立つ。どうやら二重子音は絶対的に硬音であるなどとはとうてい言えそうにない。視点しだいのようなのだ。

8. 日本音声学会, 1976

最後に、まとめの意味で標記の辞典の関係ページを繰ってみた。

“硬音…発音器官の筋肉を緊張させ、口腔や咽腔で呼気の圧力を高め、調音点における気流の抵抗が大きくなるように強く調音した子音” (p. 296)

“つまり、子音に対していう硬音 (fortis) は、母音に関していう緊張音 (tense) に対応する。” (p. 296)

“ロシア語でいう軟音は、通常、一種の軟音化、即ち口蓋化した音を指している。これに対立して、口蓋化しない音を、硬音と呼んでいる。それゆえ筋肉の緊張や呼気圧とは、全然関係のないものである。” (p. 297)

“とにかく hard—soft, fortis—lenis, voiceless—voiced 等が同様に使用されることがあるが、名称も、その現象の出現の仕方も、その取上げ方も、各国語の場合でかなりな相違が見られる。” (p. 297)

この最後の引用部分の中に soft ということばが出ている。これにちなんで英語に Velar Softening という現象がある。これは Chomsky & Halle, 1968 の p. 48 によると、

$$(72) \left\{ \begin{array}{l} g \rightarrow j \\ k \rightarrow s \end{array} \right\} / \text{ — } \left\{ \begin{array}{l} i \\ e \end{array} \right\}$$

というルールであり、調音点の同化という点で明らかに軟音化とみなしてよいと思う。また k→s だけなら、破裂音→摩擦音の軟音化でもあるのだが。

9. まとめ

一般音声学の上で、硬口蓋子音を硬音とか軟音とかに決めつけることはできない。Martinet 理論は少なくともカスティーヤ語に適用する際は、鳴音への適用は避けた方がよいようである。そもそもラテン語で二重子音イコール硬音ならば、カスティーヤ語でのその変化結果も当然硬音であるとするのは無理である。かくてカスティーヤ語では硬口蓋子音は硬音でも軟音でもないという結論になった。従って原, 1989 の p. 78 で筆者は「ちなみに λ の方が l よりも強い音である」と述べたが、この発言は撤回せざるをえなくなった。

最後に、筆者に色々有益な助言を与えてくださった佐藤 純一、倍賞 和子、斎藤 弘子、益子 幸江、中川 裕の各氏に厚く感謝する。

参考書目

Alarcos, Emilio. 1965. Fonología española⁴. Madrid: Gredos.

Catalán, Diego. 1962. Dialectología y estructuralismo diacrónico. MISCELÁNEA HOMENAJE A ANDRÉ

MARTINET 3. 69-80.

- Chomsky, Noam & Halle, Morris. 1968. *The sound pattern of English*. New York, Evanston & London: Harper & Row.
- ディ ピエトロ, R. J., 小池 生夫訳注. 1974. *言語の対照研究*, 東京: 大修館書店.
- グレーコワ, イ, 前田 勇訳, 1988. *大学教師*. 東京: 群像社.
- 原 誠. 1981. ロマンズ語学における二つのジレンマ. 「東京外国語大学論集」31. 1-29.
- 原 誠. 1984. 言語の体系性と非体系性について(上) 「東京外国語大学論集」34. 29-49.
- 原 誠. 1989. スペイン語通時音韻論の二大問題(下) —通時音韻論の展望— 「東京外国語大学論集」39. 73-106.
- Haudricourt, André & Juilland, Alphonse. 1970. *Essai pour une histoire structurale du phonétisme français*. The Hague & Paris: Mouton.
- Jakobson, Roman, Fant, C. Gunnar M. & Halle, Morris. 1961. *Preliminaries to speech analysis*⁴. Cambridge: The M. I. T. Press.
- Lausberg, Heinrich. 1965. *Lingüística románica I*. Madrid: Gredos.
- Martinet, André. 1952. Celtic lenition and Western Romance consonants. *LANGUAGE* 28. 192-217.
- Martinet, André. 1955. *Economie des changements phonétiques*. Berne: Francke.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1962. *Manual de gramática histórica española*¹¹. Madrid: Espasa-Calpe.
- 直野 敦. 1967. *ルーマニア語文法入門*. 東京: 大学書林.
- 日本音声学会. 1976. *音声学大辞典*. 東京: 三修社.
- Quilis, Antonio. 1981. *Fonética acústica de la lengua española*. Madrid: Gredos.
- 坪井美智子. 1990. 俗ラテン語子音群 -KT- のスペイン語における変化結果に関する考察. 1989学年度東京外国語大学卒業論文.
- Zamora Vicente, Alonso. 1970. *Dialectología española*². Madrid: Gredos.